

子どものソーシャル・キャピタルとそれに関連する要因 - T町の事例から -

市川 直子¹・山田 夢香²・米島 慶³・平野 裕子⁴

要 旨

【目的】本研究は、長崎市郊外の新興住宅地T町における子どものソーシャル・キャピタル（以下SC）に関連する要因を明らかにすることを目的とする。

【対象と方法】本研究では長崎市T町の自治会長から紹介を受けた子ども会加入者（小学校1年生から6年生の計58名）を対象とし、小学校1・2年生はインタビューを行い、3年生から6年生までは自記式無記名調査票を配布した。29名の対象者から有効な回答が得られた（有効回収率50%）。SCに関連する要因の分析には、Wilcoxonの順位和検定、Spearmanの順位相関係数を用いた。

【結果】「SC得点」の平均は17.4（±2.7）点であった。Spearmanの順位相関係数は、「地域に対する愛着度」「日常会話」「T町の高齢者はいきいきしていると思う」の順にSC得点との間に有意な相関がみられた。

【結論】T町における子どものSCは、子どもが地域に対して愛着や誇りをもつというポジティブな感情をもつこと、地域の大人と日常会話をする程度 of 関係構築を築くこと、地域の大人が自発的に地域の行事に参加している姿を見せること、高齢者が地域のために活動する姿を見せることに関連が見られた。

保健学研究 31 : 33-39, 2018

Key Words : 地域づくり, 子ども, 高齢者, ソーシャル・キャピタル

(2018年1月19日受付)
(2018年4月12日受理)

I. 緒言

WHOの「健康の社会的決定要因委員会」が報告書を取りまとめたように、人々の健康は経済・社会・政治・環境などの要因に影響を受ける¹⁾。この社会的決定要因の1つがソーシャル・キャピタル（SC）である²⁾。米国の政治学者であるパットナムは、SCを「個人間のつながり、すなわち社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼の規範である」³⁾と述べている。

少子高齢社会の今日、政府は平成28年「ニッポン一億総活躍プラン」を閣議決定し、老若男女問わず全員参加型の一億総活躍社会の実現を目的とした⁴⁾。このような中で、子どもは地域の一員として大人と共に地域をつくる存在として期待されている⁵⁾。

一方、都市部の急激な人口増加や地方の過疎化をもたらした結果、地方では密であった住民同士の関わりが、都市では希薄化するという事態を招いた。従って、人間関係が希薄化する現代の社会であるからこそ、地域でSCを醸成し充実させることは、喫緊の課題である。

カワチらは、「子どものSCに着目した場合、それがどのようにして生成され、維持されているかについてはほ

とんど知られていない」⁶⁾と述べている。このように、子どものSCの研究は難しく、SCの概念化を行う上で、慎重に検討され、一般化される必要がある⁷⁾。インドや、多民族国家アメリカにおける子どものSCの研究は、人種的マイノリティの子どもに対する教育上の支援を確立させる観点から、社会的脆弱性が表れやすい人種の違いごとに、子どものSCを構成する要因構造を比較する研究⁸⁻¹¹⁾が見られる。一方日本では、子ども、特に小学生のSCに関する研究は一部を除き¹²⁾十分なされていない。

本研究では、子どもたちが活躍する地域づくりを進めるためにはSCを充実させる必要があると考え、子どものSCに関連する要因を明らかにするため、T町在住の子どもたちを対象とした研究を行った。

II. 用語の定義

SC：社会関係資本。社会的ネットワーク、およびそこから生じる互酬性と信頼性の規範³⁾。

子ども：T町在住の小学校1～6年生。

大人：本研究の対象者の子どもが認識するT町在住の大人。

1 長崎大学病院

2 熊本大学養護教諭特別別科

3 神奈川県立こども医療センター

4 長崎大学生命医科学域

高齢者：本研究の対象者の子どもが認識するT町在住の高齢者。

助っ人隊：T町の住民によって独自に構成されたボランティア組織。

Ⅲ. 研究方法

1. 調査対象

本研究の対象となる地区は、長崎市郊外に位置するT町（419世帯1066人：平成28年度末現在）。T町の小学生の総人数は58名であり、子ども会の加入者割合は100%である。今回の研究ではT町の自治会長から紹介を受けた子ども会加入者である小学校1～6年生の58名全員を対象とした。

2. 調査方法

小学校1・2年生は構造化面接法で、小学校3～6年生までは自記式無記名調査票を配布することを通してデータ収集を行った。構造化面接法については、プレインタビューを行い、子どもが理解できないような言葉は省くなどの工夫を行った。また、筆者らは、調査期間前に子ども会の行事に参加し子どもとのラポールを確立した。その後、1・2年生は、T町公民館で、筆者らが子どもと対面し面接を行い、3～6年生は、自治会長を通し調査票を配布した。

プライバシーについては、調査結果は本研究のみに使用し個人情報保護について厳守することや、研究への参加は自由意思であり参加を拒絶することや辞退することで不利益を被ることはないことを、口頭および文書で説明した。面接調査においては、面接に応じることによって、配票調査においては調査票の投函をもって同意を得たものとみなした。特に面接については、答えづらい内容があれば拒否できる旨を口頭で伝えた。

調査期間は2017年8月5日～9月5日までであった。

3. 調査項目

(1) ソーシャル・キャピタル得点（以下、SC得点）

本研究では、パットナム³⁾のSCの構成概念を参考に、本研究内で使用することを前提としたオリジナルの調査項目を作成した。まず「ネットワーク」に相当する調査項目として「町の人から何か頼まれたことがある」、「信頼」を「T町の大人は頼りになると思う」「T町の大人は信じられると思う」という項目で測定した。「互酬性の規範」は子どもと地域との間の、持ちつ持たれつの関係性を測るために、子ども達が自主的に地域のために行っている活動の頻度を「自分からT町のためにすすんで何かしたことがある」で測定し、子ども達が地域に対して貢献したいという思いを「T町で困っている人を助けたいと思う」「T町のために役に立ちたいと思う」という項目で測定した。

(2) SC得点に関連があると思われる項目

本研究では、SC得点に関連があると思われる項目について、先行研究等を参考に、以下の15項目を取り上げることとした。

①調査対象者の属性：性別、年齢、学年、家族構成（核家族及び母子／父子家族または拡大家族、兄弟の有無）

②から⑤については、よくある／よく知っている＝4点、ときどきある／知っている＝3点、あまりない／あまり知らない＝2点、まったくない／まったく知らない＝1点を与えた。

②地域に対する愛着度（2項目）：「T町に住んでいてよかったですか」「これからもT町に住みたいと思いますか」（信頼性係数 $a=0.69$ ）。

③T町が新聞やTVに出ていたら嬉しいと思う度合い：「T町がテレビや新聞に出ていたら嬉しいですか」

④地域の大人との関わり方とその度合い：挨拶

⑤地域の大人との関わり方とその度合い：日常会話

⑥地域の大人との関わり方とその度合い：悩み事

上記④～⑥の各項目は、「地域の大人との関わり方：道で会ったら挨拶をする（以下、挨拶）」「地域の大人との関わり方：日常会話をする（以下、日常会話）」「地域の大人との関わり方：悩み事を相談する（以下、悩み事）」について尋ねた。

⑦高齢者に対するイメージ度：「T町の高齢者はいきいきしていると思う」

⑧高齢者に対するイメージ度：「T町の高齢者はいろんなことを知っていてすごいと思う」

⑨高齢者にお世話になっていると思う度合い：「T町の高齢者にお世話になっていると思う」

⑩助っ人隊の認知度：「助っ人隊についてどれくらい知っていますか」

⑪子どもが認識する地域の活動への大人の参加頻度：「T町の大人が町内の活動（公園の掃除、夏祭りの手伝い等）をしている姿をよくみかける（以下、地域の活動への大人の参加頻度）」

⑫子どもが認識する地域の活動への親の参加頻度：「あなたのお父さん・お母さんは、町内の活動によく参加している（以下、地域の活動への親の参加頻度）」

⑬地域の大人から褒められる頻度：「T町の大人から褒められたことはありますか」

⑭学校の先生とT町について話す頻度：「先生とT町のこと（夏祭り、助っ人隊等）をよく話す」

⑮子どもの地域の行事への参加頻度：「T町の行事（夏祭り、公園の掃除等）に参加する」

4. 分析方法

分析手順はSC得点と各変数との関連の程度をWilcoxonの順位和検定、Spearmanの順位相関係数により分析した。分析にはJMP@Prover.13.0.0を用い、有意水準は5%未満とした。

5. 倫理的配慮

本研究は長崎大学医歯学薬総合研究科倫理審査委員会における承認（承認番号17060867）を得たうえで実施した。

IV. 結果

調査票は29人（有効回収率50%）から回収された。

1. 属性（表1）

対象者は、女子が55.2%で多く、学年別には6年生が最も多かった（24.1%）。

2. SC尺度構成

本研究における子どものSC尺度の6項目間の信頼性係数 α は0.73であった。また構成概念妥当性を、「地域

表1. 対象者の基本属性 n = 29

項目		n	(%)
性別	男子	13	44.8
	女子	16	55.2
学年	小学校1年生	2	6.9
	2年生	5	17.2
	3年生	6	20.7
	4年生	3	10.3
	5年生	6	20.7
	6年生	7	24.1
家族構成	核家族および母子／父子家族	22	75.9
	拡大家族	7	24.1
兄・姉の有無	あり	16	55.2
	なし	13	44.8

に対する愛着度」の下位項目、「T町に住んでいてよかつたと思う」との相関係数をもって検討した。その結果を表2に示す。子どものSCの下位項目「町の人から何か頼まれたことがある」と関連は有意ではないが、相関係数は（ $\rho = 0.31, P = 0.105$ ）であり、当該尺度の妥当性がある程度担保されたものとみなした。

3. 属性とSC得点（表3）

性別、学年、低学年（1～3年生）・高学年（4～6年生）の別、家族構成、兄・姉の有無とSC得点の間には有意差はみられなかった。

4. 各調査項目の平均値及び標準偏差（表4）

地域の大人との関わり方及びその度合いについての3項目において、「挨拶」は4点中平均3.6（ ± 0.6 ）点と高く、続いて「日常会話」が4点中平均2.5（ ± 0.9 ）点であった。「子どもの地域の行事への参加頻度」は4点中平均3.7（ ± 0.6 ）点であった。

高齢者に対するイメージ度及び高齢者にお世話になっている度合いの3項目については「T町の高齢者はいきいきしていると思う」3.3（ ± 0.6 ）点、「T町の高齢者はいろいろなことを知っていてすごいと思う」3（ ± 0.7 ）点、「高齢者にお世話になっている度合い」3.1（ ± 0.8 ）点といずれも平均が高かった。

表2. 子どものSC下位項目および地域に対する愛着度との相関（Spearmanの順位相関係数）

	地域に対する愛着度 (総得点)	地域に対する愛着度下位項目 ¹⁾ T町に住んでいてよかつたと思う
T町の大人は頼りになる	0.57**	0.53**
T町の大人は信じられる	0.24n.s.	0.37*
困っている人がいたら助けたい	0.64***	0.65***
自分からT町のために進んで何かしたことがある	0.38*	0.37*
T町のために役に立ちたい	0.48**	0.44*
町の人から何か頼まれたことがある	0.21n.s.	0.31n.s.
SC得点	0.59***	0.64***

* : $P < 0.05$ ** : $P < 0.01$ *** : $P < 0.001$

1) 構成概念妥当性の検討時に使用された項目

表3. 基本属性とSC得点の関係

項目		平均値 (標準偏差)	P 値
性別	男子	17.1 (2.9)	0.453 ¹⁾
	女子	17.8 (2.6)	
学年	小学校1年生	18 (1.4)	0.500 ²⁾
	2年生	17.8 (3.1)	
	3年生	18.7 (3.1)	
	4年生	15.3 (2.1)	
	5年生	16.8 (2.3)	
	6年生	17.4 (3.1)	
家族構成	核家族及び母子家庭	17.6 (2.8)	0.663 ¹⁾
	拡大家族	17.0 (2.6)	
兄・姉の有無	あり	18.3 (2.6)	0.063 ¹⁾
	なし	16.5 (2.6)	

1) Wilcoxon の順位和検定 2) Spearman の順位相関係数

表4. 各質問項目の平均と標準偏差

項目	n = 29		
	レンジ	平均値	標準偏差
ソーシャル・キャピタル	6-24	17.4	2.7
地域に対する愛着度	2-8	6.7	1.1
T町がテレビや新聞に出ていたら嬉しいと思う度合い	1-4	3.1	0.8
地域の大人との関わり方とその頻度			
挨拶	1-4	3.6	0.6
日常会話	1-4	2.5	0.9
悩み事	1-4	1.7	0.8
高齢者に対するイメージ度および高齢者にお世話になっていると思う度合い			
T町の高齢者はいきいきしていると思う度合い	1-4	3.3	0.6
T町の高齢者はいろんなことを知っていてすごいと思う度合い	1-4	3	0.7
T町の高齢者にはお世話になっていると思う度合い	1-4	3.1	0.8
助っ人隊の認知度	1-4	2.4	1.1
子どもが認識する地域の活動への大人の参加頻度			
地域の活動への大人の参加頻度	1-4	3.3	0.6
地域の活動への親の参加頻度	1-4	3.1	0.8
地域の大人から褒められる頻度	1-4	2.7	0.9
学校の先生とT町について話す頻度	1-4	1.9	0.7
子どもの地域の行事への参加頻度	1-4	3.7	0.6

表5. 子どものSC得点と各調査項目との関連 (Spearmanの順位相関係数)

項目	ρ	P 値
地域に対する愛着度	0.59	0.001
T町がテレビや新聞に出ていたら嬉しいと思う度合い	0.51	0.005
地域の大人との関わり方とその頻度		
挨拶	0.21	0.269
日常会話	0.58	0.001
悩み事	0.03	0.871
高齢者に対するイメージ度および高齢者にお世話になっていると思う度合い		
T町の高齢者はいきいきしていると思う度合い	0.56	0.001
T町の高齢者はいろんなことを知っていてすごいと思う度合い	0.53	0.003
T町の高齢者にはお世話になっていると思う度合い	0.47	0.001
助っ人隊の認知度	0.42	0.023
子どもが認識する地域の活動への大人の参加頻度		
地域の活動への大人の参加頻度	0.25	0.198
地域の活動への親の参加頻度	0.23	0.221
地域の大人から褒められる頻度	0.25	0.196
学校の先生とT町について話す頻度	0.21	0.276
子どもの地域の行事への参加頻度	0.10	0.620

5. 各調査項目とSC得点 (表5)

「SC得点」と最も相関が強かった項目は「地域に対する愛着度」($\rho=0.59$, $P=0.001$), 「日常会話」($\rho=0.58$, $P=0.001$), 「T町の高齢者はいきいきしていると思う」($\rho=0.56$, $P=0.001$) の順で有意な正の相関がみられた。なお、SC得点と最も有意な相関がみられた「地域に対する愛着度」とSC得点を構成する下位項目の相関は、表2に示すように「T町で困っている人を助けたいと思う」($\rho=0.64$, $P<0.001$), 「T町の大人は頼りになる」($\rho=0.57$, $P=0.001$), 「T町のために役に立ちたい」($\rho=0.48$, $P=0.008$), 「自分からT町のためにすすんで何かしたことがある」($\rho=0.38$, $P=0.040$) の順で強かった。

V. 考察

子どものSCの定義について、内閣府の調査¹³⁾と同様のSCの定義を用いて子どものSCを測定した岡正らの研究¹²⁾では、「つきあい・交流(ネットワーク)」を、近所づきあいの数と程度等から、また信頼(社会的信頼)を、近隣の人等への期待と信頼から、「社会参加(互酬性の規範)」は地縁的活動への参加状況から測定している。

一方、本研究では、SC得点をオリジナルの6つの調査項目で測定し、その平均は、24点中17.4(± 2.7)点と高かった。このことについて、T町には子どもと大人が接する夏祭り等の主な行事が年に5回あり、随時行われている活動として助っ人隊や、その子ども版であるちびっ子助っ人隊というボランティア組織もあるため、大人と子どものネットワークが密であることが考えられた。

また、子どもは行事の際に大人が地域のために活動している姿を見ているため、大人に対する信頼感を持ちやすいことが考えられた。

1. 地域の大人との関わり方とSCとの関連

本研究では、対象者となった子どもと地域の大人との関わり方について、「挨拶」(93%)「日常会話」(52%)「悩み事」(17%)の順で「よくある」「ときどきある」と回答していた。このように、多くの子どもが地域の大人と挨拶を交わしている一方、「日常会話」「悩み事」では、その頻度は減少することがわかる。一方、地域の大人との関わり方とSC得点との関連については、相関が強いものの順に「日常会話」($\rho=0.58$, $P=0.001$)「挨拶」($\rho=0.21$, $P=0.269$)「悩み事」($\rho=0.03$, $P=0.871$)という結果であった。

乳幼児を育てる母親の子育て環境を研究している草野ら¹⁴⁾によると、近所付き合いの程度の4段階(生活面でも協力、日常的に立ち話をする程度、挨拶程度、全くない)のうち、生活面で協力すると回答した者よりも、日常的に立ち話をする程度と回答した者の方が、その地域で子育てをしやすいという結果が示されている。T町の子どもにおいても、形式的に挨拶を交わしたり、悩み事を相談したりするよりも、日常会話をする程度の関係性を構築する方が、子どものSCを高めるのに効果的であると考えられた。

2. 大人の地域活動とボランティア活動及びSC得点との関連性

本研究では、地域の活動への大人の参加頻度については、平均が3.3(± 0.6)点、地域の活動への親の参加頻度については、3.1(± 0.8)点で、いずれもSC得点との間に有意な相関はみられなかった。一方で、地域の高齢者で構成される助っ人隊の認知度については、平均が2.4(± 1.1)点であったが、SC得点との有意な相関がみられた($\rho=0.42$, $P=0.023$)。

子どもの地域活動の参加要因を研究している樋野ら¹⁵⁾は、子どもの地域参加を促進するためには親自ら活動に参加し、その姿を子に示す実際の行動が最も重要であると指摘している。だが本調査の結果、地域の大人や親の地域の行事への参加頻度とSC得点との間に有意な相関はみられなかった反面、子どもによる助っ人隊の認知度はSC得点と有意な相関がみられた。これは、地域の大人や親が参加する地域活動には、自治会活動の掃除当番等半ば強制的に与えられた役割を担うことがあるためであると推察される。一方、助っ人隊の活動は、住民が自らの意思で積極的に行っているボランティア活動である。このことから、自治会活動も助っ人隊も地域の大人の活動であるが、子どもの目には、そのような活動の大人の取り組み方としては、別の異なるものと映っていた可能性が考えられる。地域の大人が半ば強制的に与えられた

役割を果たす姿よりも、助っ人隊のように自主的に地域のために活動している姿を見せる方が子どものSCに関与しているのではないだろうか。

3. 高齢者との交流の機会とSC得点との関連

T町は、夏祭り等、老人会と子ども会の共同行事があり子どもは高齢者が地域のために活動している姿を見る機会が多い。調査票の自由記載に「高齢者がT町の活動をして大変そうだった」とあったように、子どもは町の高齢者の姿を日頃からよく観察していることが伺えた。

一方で、SC得点との関連については、高齢者に関する3つの調査項目いずれとも有意な相関がみられた。つまり、高齢者がいきいきしている姿を見たり、高齢者にお世話になっているという認識が高い程、子どものSCに影響するのではないか。T町では、子どもが高齢者と同じ場を共有し、高齢者の姿を捉えることができるという環境が整えられていたからこそ、子どもの持つ高齢者へのイメージは好意的なものとなり、さらに、お互いに協力しなければならないという規範を共有する機会にもなっていたと考えられる。世代間閉鎖性のある地域社会は、住民の相互補完的交流活動や子どもを中心とした地域づくり活動と強い相関を持つことについてはアメリカ・シカゴにおけるSampsonらの研究¹⁶⁾でも裏付けられている。T町においても、これら地域社会での世代間の交流が、子どものSCを高めることに功を奏していたことが考えられた。

パットナムは、「かつて『われらの子ども(our kids)』は町に住む子ども全員を指す言葉で、子どもの世話をすることは以前は広く共有された集合的な責任であったが、そのような倫理感はこの数十年で衰退し、社会全体で子どもを育てるという意識がなくなった」¹⁷⁾と述べている。日本においても、地域の大人は子どもに対して目を向け、地域で子どもが活躍できるような環境を整える責任があると思われる。

VI. 研究の限界

本研究は、子ども会加入の児童を対象としており、調査票の回収率が50%と低かった。このため、もともと地域に関心を持った子どもが回答した可能性が否めない。また、T町は地域活動が活発であり、住民同士の交流が頻繁に行われているという特殊性があり、本結果の一般化は困難である。だが、わが国においては、子どものSCの測定に関する知見は非常に限られているため、これらの研究の限界を踏まえてもなお、基礎的なデータを提供したという点で本研究の意義はあったと考える。

VII. 結語

分析から得られた知見を要約すると、以下の通りである。

1. 子どものSCに最も強く関連していたのは、子どもの地域に対する愛着度であった。
2. 子どもの地域の大人との関わり方については、日常会話程度の付き合いがT町の子どもにおいてもSC得点と有意な相関がみられた。
3. 大人の地域活動について、子どものSCと有意に関連があったのは、自発的な活動を行っている助っ人隊についての認知度であった。
4. T町の高齢者に対する好意的なイメージは、子どものSC得点に有意な相関をみた。

引用文献

- 1) World Health Organization: 「健康の社会的決定要因 (SDH)」に関する主要文書の邦訳, http://www.who.int/kobe_centre/mediacentre/sdh/ja/ (2017年10月31日アクセス)
- 2) 相田潤, 近藤克則: ソーシャル・キャピタルと健康格差. 医療と社会, 24 (1), 54-74, 2014.
- 3) ロバート・D・パットナム著・柴内康文訳: 孤独なボウリングー米国コミュニティの崩壊と再生, 柏書房, 東京, 2010, 14.
- 4) 首相官邸: 「ニッポン一億総活躍プラン」フォローアップ会合. 首相官邸, <http://www.kantei.go.jp/jp/singi/ichiokusoukatsuyaku/pdf/gaiyou2.pdf> (2017年10月30日アクセス)
- 5) 宮城県: 地域をつくる子どもたち (意見書). 宮城県, <https://www.pref.miyagi.jp/uploaded/attachment/255017.pdf> (2017年10月30日アクセス)
- 6) M. ビルタネン, J. エバステイ, T. オクサネン, M. キビマキ, J. パーテラ: 学校におけるソーシャル・キャピタル. ソーシャル・キャピタルと健康政策ー地域で活動するために, イチロー・カワチ, 高尾総司, S.V.スプラマニアン編, 近藤克則, 白井こころ, 近藤尚己監訳, 日本評論社, 東京, 2013: 100-101.
- 7) Morrow V: Conceptualizing social capital in relation to the well-being of children and young people, A critical review. Sociol. Rev., 47 (4): 744-765, 2008.
- 8) Stanton-Salazar RD: A social capital Framework for understanding the socialization of racial minority children and youths. Harv. Educ. Rev., 67 (1): 1-40, 1997.
- 9) Portes A: The two meanings of social capital. Sociol. Forum, 15 (1): 1-12, 2000.
- 10) Vikram K: Social capital and child nutrition in India The moderating role of development, Health and Place, 50: 42-51, 2018.
- 11) Hemmerichs K, Echeverria, Vicente N J, Agirdag O, Kavadias D: Social Capital and Mathematics Achievement of Fourth and Fifth Grade Children in Segregated Primary Schools, Journal of Education for Students Placed at Risk: 1-21, 2018.
- 12) 岡正寛子, 田口豊郁: 子どもの発達に焦点をあてた地域の役割ー子どもの認識するソーシャル・キャピタルの測定から. 川崎医療福祉会誌, 21 (2): 184-194, 2012.
- 13) 内閣府国民生活局市民活動促進課: ソーシャル・キャピタルー豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて, 独立行政法人国立印刷局, 東京, 2003, 126-133.
- 14) 草野恵美子, 奥野ゆかり, 佐藤文子, 和木明日香, 浅見恵梨子, 上田恵子, 吉田久美子: 乳幼児を育てる母親の「近所づきあいの程度」がその地域における「子育てのしやすさ感」に及ぼす影響. 大阪医大看研誌, 3: 10-17, 2013.
- 15) 樋野公宏: 子どもの地域活動の参加要因と健康関連要因の構造分析ー保護者の意識・行動および地域の安全環境に着目して. 日本建築学会計画系論文集, 77: 2119-2125, 2012.
- 16) Sampson RJ, Morenoff JD, Earls F: Beyond social capital-Spatial dynamics of collective efficacy for children. Am. Sociol. Rev., 64: 633-660, 1999.
- 17) ロバート・D・パットナム, 柴内康文訳: われらの子どもー米国における機会格差の拡大, 創元社, 大阪. 2017, 253.

A study of the social capital for children and its social implications: Case of T community

Naoko ICHIKAWA¹, Yuka YAMADA², Kei YONESHIMA³, Yuko O. HIRANO⁴

- 1 Nagasaki University Hospital
- 2 Yogo Teacher Training Special Course, Kumamoto University
- 3 Kanagawa Children's Medical Center
- 4 Institute of Health Sciences, Nagasaki University

Received 19 January 2018

Accepted 12 April 2018

